

- (八) 祖師は化主なり、建立者なり、宗徒は眷屬なり、祖述者なり、建立は祖述宣傳せしめんがための建立なり
- (九) 逆誘救治を立教の起因としたる本化の宗は逆誘のあらん限り折伏主義の自行化他を正意と爲す
- (十) 本門の戒壇を事實に現出するまでは逆誘救治の方針なり
- (十一) 折伏主義の宗門は道品行相すべて折伏的組織ならざるべからず
- (十二) 折伏を主義としたる宗門は同時に攝受を主義とすることを得ず
- (十三) 攝折兼用又は雙用等、兩途不收の雜義は既に當家の大判に達し又甚だ世を誤る邪説なり
- (十四) 宗門大判折伏主義の下に於て扶化及び内勸の爲め行ずる悉權的攝折は固より隨宜應用を妨げず
- (十五) 玄立宗の綱格と扶化内勸とを混じて妄議斷斷したる多くの攝折論議は兩ながら不可なり
- (十六) 攝受説にあらざる非折伏論は宗學上度外の俗論なり
- (十七) 折伏主義の宗門は個人の安心のみならず宗門團體の上にてこの施設行動を表現せざるべからず
- (十八) 六官論文書等によりて爲すべき布教は必ず宗團の動作たるべく個人の任意布教を許すべからず
- (十九) 九斷々平として強大嚴明なる教權を定め宗法不違の異議俗論を宗内に禁遏して遺芥なからしむべし
- (二十) 三主義に於て強剛嚴明なると共に宗教的附屬事業たる扶化門に於ては務めて寛容宏雅の態度を取り他宗他教および社會と相携へて國利世益を輔接すべし

まづゴツと這ンなものだが、何分にも組織的に論ずるのが始めての問題であるから、これで満足したとは決して謂へない、此講演が攝折問題討究の序幕であらうと想うのだから、本論を發表すると同時に、本講述の各面に伏在して居る夥多の宗義的淵旨をば、如法の討究者に對つて相談的に開示すべき責任が予に在るものとあふから、爾ういふ向の相談相手にはいつてもなるつもりである、それで若しも予の主張する所が祖意に協はないとなつたら、予は何時でもこの主張を抛ちて潔く不明を天下に謝するサ。

第二章 攝折の内容的一致

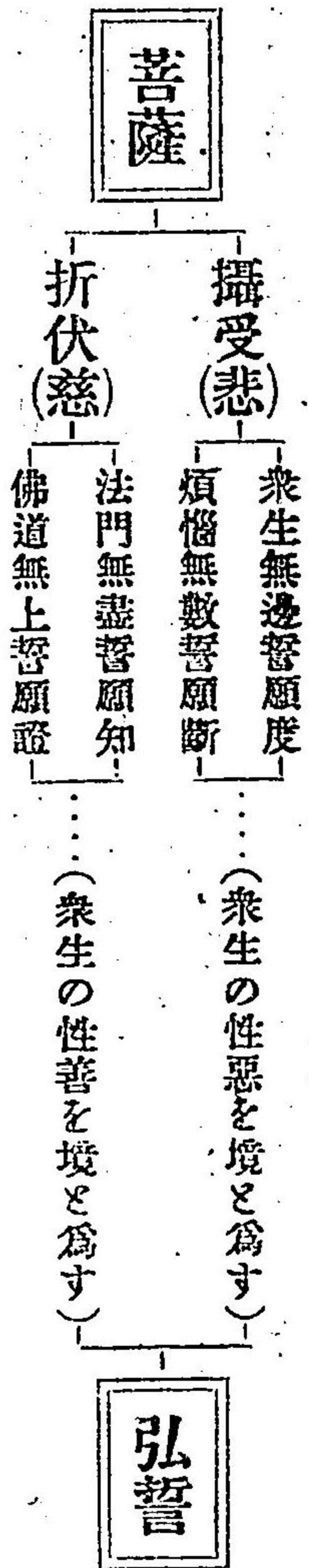
元來攝と折と根元は慈悲から出るもので、齊しく人を救うのであるから、その發作の趣を異にせるにも拘はらず、その内容は恒に一致して居るのである、全体慈悲といふことが渾然たる一大愛念で、たゞ所對のために「慈」と「悲」との二面の發作を爲したのである、「慈」は與樂で、「悲」は拔苦である、樂を與へるといふのは主觀的發動で、苦を抜くといふのは客觀的發動である、即ち「大慈與樂」の動機はといふと、衆生の性善を緣して起り、「大悲拔苦」の心は衆生の性惡を緣して起るので、「慈」は善を與ふるに急なる場合に、「悲」は惡を排うのを急とする場合に、ものゝく相手と境遇との必要からして、表裏を異にして發作するのだから、慈と謂つても、その裏面に「悲」があり、悲にも亦「慈」が存して居て、『慈面悲裏』か、『悲面慈裏』かの別である、譬へ

て言ふて貧乏のものを救うてやるに就て、資産を得る途を授けろといふのが「慈」で、先づ取り敢へず目前の困苦を救ふべく、借金でも代償してやるとか、其日／＼の食物でも給してやるといふのが「悲」で、前者が根治的、後者は應急的で、いづれも愛の發動だが、「慈」は道義性の同情で嚴規的、「悲」は人情性の同情で愛憐的である。「衆生の性惡」に同情して起るのは攝受の悲門、「衆生の性善」に同情して起るのは折伏の慈門といふ由で、趣向に於ては別、内容に於ては一であるから、或る意味では攝受は變則の折伏で、折伏は變則の攝受だといつても可いのである。

攝の字にも「飭整」の義があつて處分的意味を持つて居るし、又折の字にも杜分の切で「テイ」異音で「ダイ」の音に呼ぶ時は「安靜」の義になつて、「吉事はその折々爾たらんことを欲す」など言ふ語もあるから、畢竟は内容に於て一致を證して居る、父の「嚴教」と母の「愛訓」とが形に於て別れて意に於て一致して居るやうなもので只場合がいつれを要するかが問題なので、場合を失すれば雙方所詮を失つて了う、愛訓なるべき場合を叨りに嚴教を用ゐて、繼子的のいぢ／＼したものをつ造つたり、嚴なるべきを叨りにあまやかして腕白息子にして了つては、親としての本分が缺けるのだから、大に慎重を要するやうな由である。

慈にも悲にもちの／＼「生緣」、「法緣」、「無緣」の三ツがあつて六個の異相を成して居て、それが「誓願」に任持されて發生するのが菩薩の慈悲といふのである、乃ち攝受は悲門であるから、「度願」と「斷願」の二誓を

起點として發し、折伏は慈門だから、「知願」と「證願」の二誓を起點として發するのだ



以上は普通の義門に就て、菩薩の行化に於ける慈悲の發動を證明したもので、多分は「生緣」と「法緣」との分齊であつて、要するに悉檀的攝折の場合である、佛の慈悲となると「無緣」の慈悲であるから、菩薩の格のみでは推せない、聖祖の折伏は此點で斷ずれば無論如來の慈悲に屬して、起悉檀の折伏である、元來能囑の教主が本門の佛で、その本眷屬は迹佛以上に位するのだから、本化の弘經は如來の直化と同格で、本地果海より流出した本因妙行の大慈折伏である。

菩薩は佛を兼ねることは出来ないが、佛は菩薩を兼ねるのである、無緣發動の慈悲は自ら生法二緣も具つて居るので、外形も大なるだけ内容も大なのである、大折伏の裏には大攝受が潜在して居る、例へば初心の菩薩にとて説いた安樂行が、聖祖の上にはいかに内容的存在を爲して居るかといふと、『法華經の故に大難に遭ふを以て日蓮が安樂行と爲す』と御判釋なされてある、即ち法難に對して攝受なされたのである。

第三章 攝折の外形的異點

慈と悲との根元動機に就ては前にいふ通りであるが、いざ發動しての上では、大に難易輕重の差がある、弘の法にも優劣がある、行にも難易がある、位にも淺深がある、即ち所對の機も時運も違つて居るからである、『勝鬘經』に『重惡には折伏、輕惡には攝受』と分け、今經に『初心は攝受行、後心には折伏行』と定めたるは、いづれも攝受は易く折伏は難いといふことを證して居る、高等の忍力がなくては折伏は出來ないものであるからのことだ、故に南岳大師は『三種の忍』を説いて(衆生忍、法性忍、神通忍)その最下の「生忍」てまへ『是れ初學の能く爲す所にあらす』と況量し、その第三「神通忍」を説て

涅槃ヲ證スルヲ得テ深ク實際ニ入り、上諸佛ヲ見ズ下衆生ヲ見ズ乃至一念身中一切身ヲ現マテ一時ニ説法シ、一音能ク無量ノ音聲ヲ作シ、無量ノ衆生一時ニ成道ス、是ヲ神通忍ト名シ(安樂行儀)

と釋して、深位の菩薩ならでは此「忍」を得られないと説てある、折伏は此「三忍」が具つたものでなければ出來ないのだから無論難いのである、深位を要するのである、隨つて其法も勝れて居るのである、『攝受は一部の弘通、折伏は要法の弘通』と妙樂大師は判じ、『易きを去て難きに就くは丈夫の心なり』と傳教大師が釋したのは乃點である。

ところで吾人宗徒は、いづれも直也の凡夫であつて實は初心始行とまで行かない分際なのである、何等の「忍」も得て居らぬのである、勿論折伏どころの沙汰でないのだ、それが「折伏主義」の奉行者として爲す弘經は、先づ自らを没却して、聖祖の光明中に融歸しての行動であるから、自分が爲すのではなくして、聖祖がなされるのである、主張も固より自分の主張ではない、利益も固より自分の利益ではない、たい自分のものとして信念である、「不惜身命の心地」から成立した本化門下の「信」は、確かに種々の道品徳行に換へて餘りあるのである、これにて主義的行動が任運に一の大行化になつて行くのだから、みづからは「折伏」ども「忍」どもそんな心配は要らないので、唯いかにせば祖意を得、いかにせば祖教を傳へ得るや、即ちいかにせば圓滿の信を得られるかといふことだけが、吾等宗徒の第一肝要なる心掛けである、斯くして無上の信仰を聖祖に捧げることが出來たら、それからの念持行動は即ち聖化せられての發動だから、自分のする折伏ではなくて、依然 聖祖が今にもなされてあるのだ。



第四章 悉檀と攝折

「悉檀」の行意は隨宜といふことにある、攝折を「悉檀的」に應用するのは、全体は佛祖で無ければ出来ないのだ、凡夫は時機の鑑識が不充分だから、「但令用實的」に專一に主義を堅守するのが正當であるのだ、宗旨的事項でない場合に限りて、局部の悉檀的應用を否認しないのである、それが「悉檀的攝折」といふので、即ち「宗旨的攝折」ではない。

「超悉檀の攝折」は、法華經を説き授ける上に於て、その本能から出た、根底的發動であるから、即ち「宗旨的攝折」であつて、聖祖は其内の折伏の方をお用になつたのだから、之を「超悉檀の折伏」といふのだ。

宗旨の「正化」は悉檀的でない、「扶化」は悉檀的である、「立宗門」、「正行門」は超悉檀的で、「勸誡門」「助行門」は悉檀的であるのだ。

予が法門ハ四悉檀ヲ心ニ懸テ申ナレバ強チニ成佛ノ理ニ違ハザレバ且ク世間普通ノ義ヲ用フベキ歟(太田金吾御返事)

の御文によつて「悉檀正意」を主張しようとしたものがある、以ての外の認見である、これは立宗門以外に於ての扶化談で、太田左金吾が五十七歳の厄年に就て、慰安の爲め、金吾が本性なればとて、春夏の間は何事

もなかるべしと、『至門性經』を引て、五行生尅の説を擧げられた淺近の談理を會通するために、此「四悉檀を心に懸て」の御自判があつたので、明かに「世界悉檀」の方便扶化である、即ち宗旨教義の談道でない證據である、宗旨的折伏の用否は成佛不成佛の關する所て、世間普通の義で捌くべきものでなす。

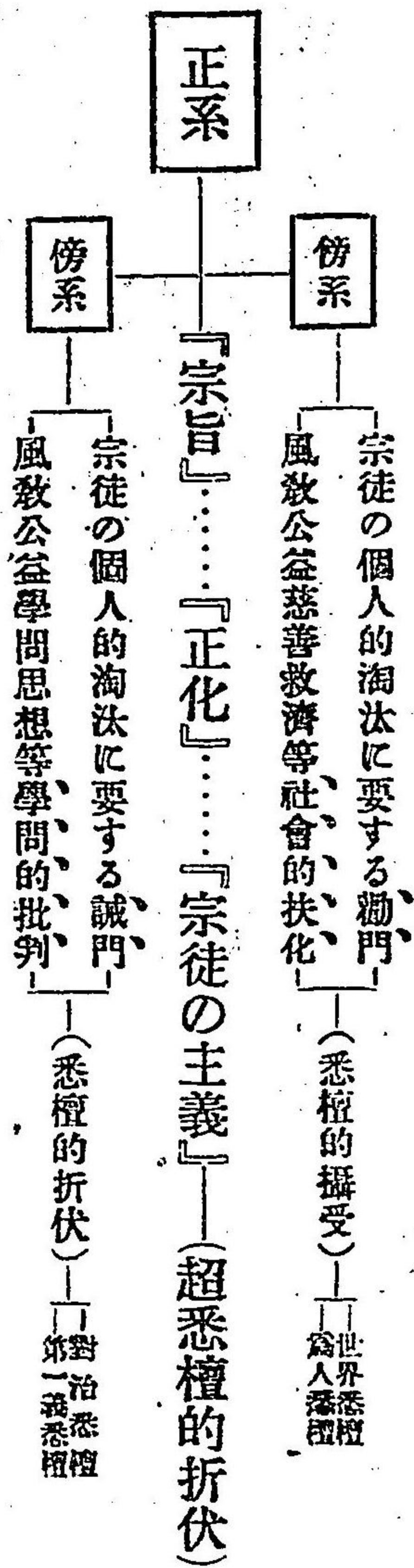
「下種益」の正對象となるものは、「本未有善」の機で、『結緣衆』である、「結緣衆」は悉檀の効のないものとすのは既に定つた網格である、故に天台大師は

過去ノ根淺ク、覆漏汗雜ニシテ三慧生セズ、現世ニ見佛聞法スト雖、四悉檀ノ益ナシ、但ダ未來得度ノ因緣ヲ作ス、此ヲ「結緣衆」ト名ク(文句五)

と釋してある、覆漏汗雜の四失は謗法に約したので、聞思修の三慧がないから「逆化」より外は度すべき途がないので、到底「四悉檀」の利益なきものと判じた、妙樂大師は

聞慧ナキガ故ニ器ノ現ニ覆ヘルガ如シ、思慧ヲ闕クガ故ニ器ノ已ニ漏ルカ如シ、修慧ナキガ故ニ器ノ汗雜セルガ如シ乃至三慧ナシト雖、然モ種ヲ納メテ性ニ在ク擊珠ト爲ストテ得乃至聞ナキガ故ニ「世界」ナシ、思ナキガ故ニ「爲人」ナシ、修ナキガ故ニ「對治」ナシ、證ナキガ故ニ「第一義」ナシ(記上)

伏て、三慧四益を全亡して居る末法の『結縁衆』に加ふべき折伏でない、末法相應の折伏は全く本法の流出本能たる、「超悉檀の折伏」であること、火を顧るよりも明かである、若し「開顯の四悉」または「本地の四悉」といふのは、こゝにいふのと別で、それは寧ろ「超悉檀」の方に屬して居るのである。



宗門的態度以外に於ては、或は社會的に、或は道義的に、或は教育的に、或は學問的に、慈善を奨め、風教を扶け、時代の思想に對し哲學的批判を試みる等の世間段的事業に就ては、本宗主義の抵觸を來たさざる限り、世善を補助するための悉檀は尤も然るべきこととあらう。

第五章 實行的折伏

吾人が身心を献じて遂行すべき一大主義としての折伏行は、必ず色讀的でなくてはならぬ、教門の折伏は哲學的であつて、行門の折伏は實行的である、即ち道德的に操持すべく、國家的に發動すべきものである、聖祖の折伏は教行二軌の中、いつれに屬すべきものなりやは、宗學上深奥の研究問題であつて、兩邊いつれも道理文證が存して、立派な題算になつて居る、委細の議論はこゝには盡されないが、この事に就ては、予も大に議論を有して居るから、別に『攝折教行辨』を草して、之を論述したいとあつて居る、依て今は折伏の當然發達すべき歷程の經過として、教門より起つて終に行門に達すべきものだといふ通判によりて、聊か吾人の上に於ての教行進退を示して置く。

教門の折伏は、教學及び論辨の上に立つので、言論文章の布教などはこれに屬して居る、此には別に議論もないが、行門の折伏になると、大に議論がある、先づさし當り、「個人的實行」と「國家的實行」の二つと見てよろしい、「個人的實行」とは、自分先づこの主義の實踐躬行を作して、己れに持し他を規するので、即ち道德的に護持するのである、本門の妙戒を奉持するといふのは是れだ、即ち主義を守るといふ表現的行爲である、他宗の神佛を禮拜しないとか、他宗のものゝ事を共にしないとか(宗旨的事業の事である、宗旨以外の

事項には此制を用ゐない(異主義の施を受けない)か、異主義に施さないとか、主義の履行に就ての財的貢獻、身的貢獻、自行化他に亘つてすべてを律儀的に持するのである。

「國家的實行」とは、正しく『涅槃經』の說相の如く、聖祖の豫期の如く、『王民一致學國一乘』の曉に達せんとする大理想的聖國が、國家の動作で起す實行的折伏で、これは本宗開顯の國家觀である、曠々者流がや、ともすると之を妄議して、羅馬法皇的だの、舊世紀の思想だのといふが、全體彼等は國家の何ものなるや、政治と宗教とのいかんの關係なるものなりやを知つて居るか、「教權」といへば、直に羅馬法皇を早計するのは、何たる薄ッペらな腦だらう、形が背て精神の異なるものはいくらもある、山賊の首魁も手下に望めれば長上だけれども、君臣の義を以て論ずべきものでない、頭が固くて緋の衣を着るゝすれば貴いといつたからとて「ほうすき」を坊さんといへるか、二十世紀の智識が必しも行止りの文明だといふことは出来ぬ、佛祖の智識は時代以上の眞際を先見してゐるのだ、國家の經營といつたところが、今日の政治的智識が、モンテスキュー、ルソー、ミルトン、ロックの上にとればどの超越した考がある、「民主主義」だの「社會主義」などの幼稚なる蠻的思想が、左も新智識らしく扱はれて居る世の中ではないか、共和政治のあまりに艸莽的なるに飽て、『北米大帝國』の建創せられん時ともなつたら、或ひは彼のメツテルニツヒの頑強も神聖視せらるゝに至るかも知れない、然れども是れ等の消長起伏は、幻の世界、夢のナポレオンと共に、すべて迷中の是非である、

本地開顯の國家觀は、三災四劫の外の常寂光土の國家の謂で、國と國との争ひや人の人との争ひでなく、即ちパンヤ土塊の争でなく、善と惡との争、義と不義との争、迷と悟との戦、凡と聖との戦で、大道を以て不道を征伏する所の天任的國家を建立するのである、少くも數世紀を先見した推究的合理的豫言である。

理論の最極進歩は「事功」である、妙宗の事功主義は即ち煩惱の事功(功利主義)を打破して、強菩提力の事功を建立するのである、「折伏主義」の命ずる所は、此理想境に進行すべく豁然邁往するのである、「事的勢力」を以て無上の道力とすることは、折伏門の固有義趣である、『勝鬘義疏』に經の攝折二門の「得力」を釋して、攝受を『道力』といひ、折伏を『勢力』といつてゐる

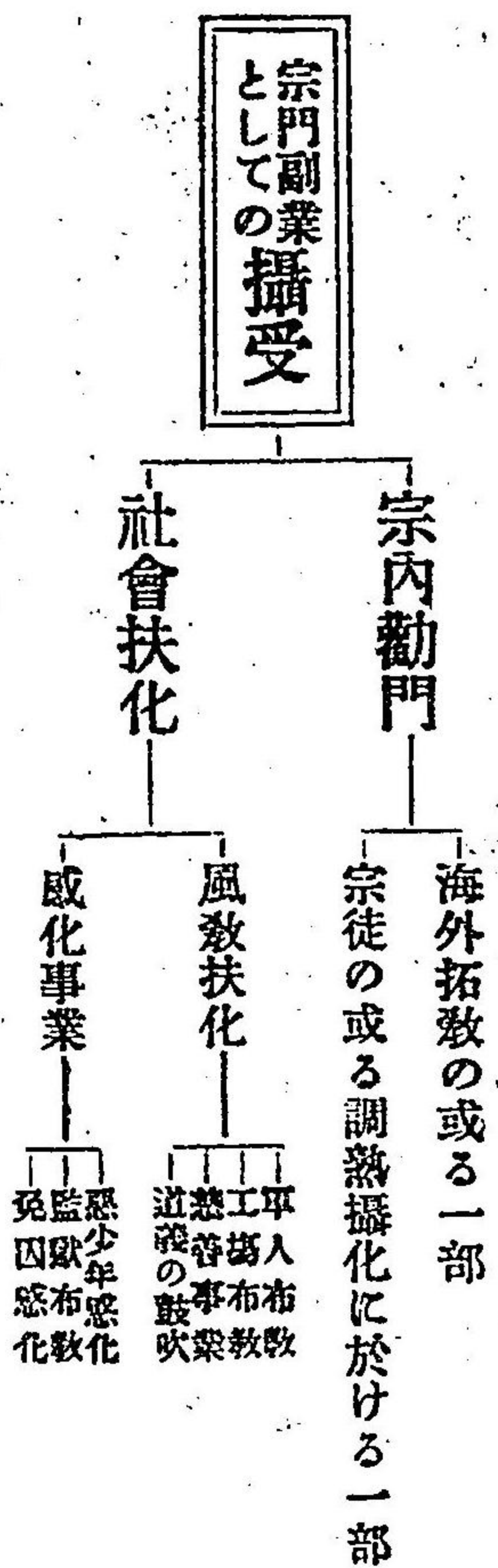
我力ヲ得ン時トハ、力ニ二種アリ、一ニハ勢力、二ニハ道力ナリ、若シ善ヲ行セザレバ即チ諸道皆閉ゾ、生死ニ流轉シ六趣ニ遷移ス、ユエニ大士彼々ノ處ニ於テ、皆此人ヲ見、重惡ニハ即チ勢力ヲ以テ折伏シ、輕惡ニハ道力ヲ以テ攝受ス

『勢力』即ち事功力が道力よりも優つて居るといふことが、此活釋でわかるだらう、聖德皇太子が事功的に佛法を扶植すべき端を啓いたのは、此大見識を善へて居られたからである。

猶此段の要義は、『教行辨』に詳論するつもりである、『宗門之維新』は聊か事實的に之を説いたのだから、參考してもらいたし。

第六章 宗門の副業としての攝受

宗旨的態度の外に於ける、附屬事業即ち宗教的副業は宗門の社會的動作として當然具備すべきである、慈善の如き、公德問題の如き、風教倫道、感化等、これ等は素より宗門の「主義」でなくして、むしろ「義務的事業」である、隨つて之に當るには宗旨的態度でなく、悉極的態度でやらねばならぬ、而してその場合は多く攝受的(むしろ四攝法的)勸化でなくてはならぬ、此方面に於ては、念佛教徒であらうが、耶穌教であらうが快く相携へて世を益すべく從事するのが當然である、予は恒に此等の問題に就ては、毫も排他的態度を取つたことがない、今宗門の副業としての攝受的扶化の範圍を概提して見ると、凡そ左の如くである。



これ等の多分は宗門主義の直接對象でないのだから、即ち仕事の性質が違ふのだから、宗旨を弘めるといふ第一義から一段下りて、側面から社會的幫助を興へるといふ態度なのである、爾ういふ場合に「念佛無間」だの「眞言」だのと曰つたつて、何の功能もないのみならず却て害がある、相手の方よりは當方の宗旨を失墜することになる、宜く攝受的に悉極施化しなければならぬ。

猶折伏的布教の「除外例」としては、病人、瘋癲白痴、宗學未熟のもの等である、此等はいかに折伏主義の宗旨でも、布教に堪へないから除くのである。

第七章 折伏傳道の態度

折伏主義の弘教に就ては、その精神態度ともに大に主義的一致を要するのである、先づ第一に宗意の大安心が確定して、信念解了ともに如法でなければならぬ、第二に自身これが實行者でなければならぬ、第三に辯論講説すべて意義明了にして親切丁寧に、その態度又懇篤公明でなければならぬ、一言にいへば自我的排他心ではならぬ、更らに換言すれば大慈悲大信念の發動でなければならぬ。

主義嚴厲、主張嚴明、氣節堅高、風度整正、言語粗野ならず、談理淵底を盡して回省の路あらしむるやう、萬解の同情を所對に注いで、その迷想を救うべく、切々懇々全身の血と涙とを絞りて、説き去り説き來て、

聖祖の大慈光を彼の色心に感被せしむるのである。

時代の變化によつて、思想の潮向も一轍でないから、説明會通に就ては、一に舊式のみを固守するのはよろしくない、須らく内外の學問智識を應用し、或は批評的に或は開會的に宗旨の妙義を發揮して、時代の思想を進退成敗し、以て唯一妙乘の尊貴を知らしむるやう心掛けねばならぬ。

折伏的態度には、往々頑強固陋の風、惡言粗野の態が附いて廻るやうだ、世人が誤つて折伏を厭惡するのも一つは此惡風儀を見るからである、畢竟大慈道念から出るのて無く、宗我見我から發動した似而非折伏だから、そんな弊があるのである、中には「折伏すき」といふの類もある、此等の徒に誤られて、聖祖の洪業に累を及ぼしたのは、いかんとも残念である、予は常に予が門人に之を規戒して居る、慙くとも予が言論壇上に立てる態度の如くなれと誡めて居るのだ、大なる折伏主義は大なる寛容と謙下とより發するのである。

第八章 折伏主義を體現したる宗門制度

折伏主義は「個人の主義」と共に、「宗門の主義」である、而して其施設行動は必ず宗門的事業でなければならぬ、即ち宗門が折伏主義の法人的状態に組織せられて、主義を體現して居るのでなければならぬ、若し個々別々に主義的行動を爲すものとする、時ありて自身の齟齬を生じた場合に、之を律法的に規戒するも

のがない爲め、遂に力も殺げ趨向も異化して行くといふ憂がある、うまく遣つたところが一人づゝの力である、之を宗門的動作として、その一大機關の下に動くのであると、精神行動の一致を期するに便なるばかりでなく、一人の力の上に既に一宗の後援力が伴つて居るから、一人即三百萬人、一宗の全複力即三千億倍の協同勢力を生ずる理合だから、「異昧同心ならば萬事を成す」の祖訓の通り、廣宣流布の大願、國土嚴淨の大業、決定して成辨すること、信ずるのである……願くは一宗の道俗、宿眠を破つて猛然自省し、一齊に聖祖の御膝下に拜跪して、健全なる誓ひと勵みとを以て、一舉に雜亂の紛々を捨て、正直に祖教の命ずる所に隨順して、如法の宗門制度を興立して、祖師の思召通りの宗門にしてもらひたひのだ。

不肖淺學の論辯、定めて眞意の徹底しない事もあらう、隨つて粗漏も語弊も多からう、説き盡せなかつたこともあるから、疑難のある處は遠慮なく申出を請はうと思ふのである、しかし、娼罵嘲弄的は呉々も断りして置く、若したつてとあらば已むを得ないから、敢て應戦を辭せんけれども、眞摯の研究を抛却するのが遺憾であるから、特に注意するのである、怒るものには眞を語ることが出来るが、だれがひやかすものに向て眞面目な話しをするものがあらう、予は吾が本化門下の諸士が一たび此「本化攝折論」に接した以上はその圓機淳熟なるものは、直ちに圓解開覺して共然として正義の聲を揚げるだらうと思ふ、又信念未

熟の人でも、必ず篤實の研究か、堂々の論議かの態度に出で、大に眞摯誠度の論究が興るであらうと想はれる、又爾うありたいのである。

本論に演べきれなかつた要義は、別に「攝折四品辨」、「佛種論」、「攝折教行辨」等を述して補うつもりである、尙「攝折」の附屬問題として左の數項の研究をも要するのである、有志の人々は進んで忠實なる研究をしてもらひたす。

◎「雙」但「三軌の攝折法門に關涉せる法義的分別

◎宗門儀制上の「受」「不受」得失論

◎「信」法「三行の宗義的研究、附たり「法行助開」の得失問題

◎謗法罪の義門分別、并にその禁斷實行の範圍

* * * * *

先づこれにて本題の講演を終結して置く、……唯一日も早く、まことの宗旨にしたい！

今身より佛身に至るまで能く持ち奉る 南無妙法蓮華經 南無妙法蓮華經 南無妙法蓮華經

本化攝折論畢

附 錄

○科外講演一則

○講習會雜記

科外講演演

信仰と道德の調和

今成乾隨師講述

秋葉顯正筆受

序論

予は信仰と道德との調和と云ふ講題につきて所見を陳述すべし。予が所謂信仰とは法華經の信仰であつて、道德とは人間普通の道德を云ふのである。信仰とは出世間的の動機であつて、道德とは世間的の行爲である。又信仰は絶對善に契合せんとするのであつて、道德とは相對善を完成するのである。既に信仰と道德とは絶對と相對との關係あるとすれば、固より衝突し居るべき筈はないが、實際社會の狀態を觀察するに、或る信仰家は我は無上の大法を受持し安心立命の境に住し居ると稱し、更らに普通倫常を念頭に置かない傾向がある。之れは妙法には一切の功德を包含すれば萬善を拋棄するも差支なしとの立脚地より來た處の誤謬である。或る道德家は謂へちく、人の人たる所以の本務を實行すれば夫れにて足る。宗教の如きは常識を没したる非道理のものにて、畢竟道義觀念の缺亡

せるもの、方便に過ぎない。道徳を實行するの自覚心なきものこそ信仰も必要である。知行合一の我等には無用の長物である。斯様に極端に走り居るのである。そこで信仰と道徳の衝突と云ふ思ふべき現象を顯現するのである。

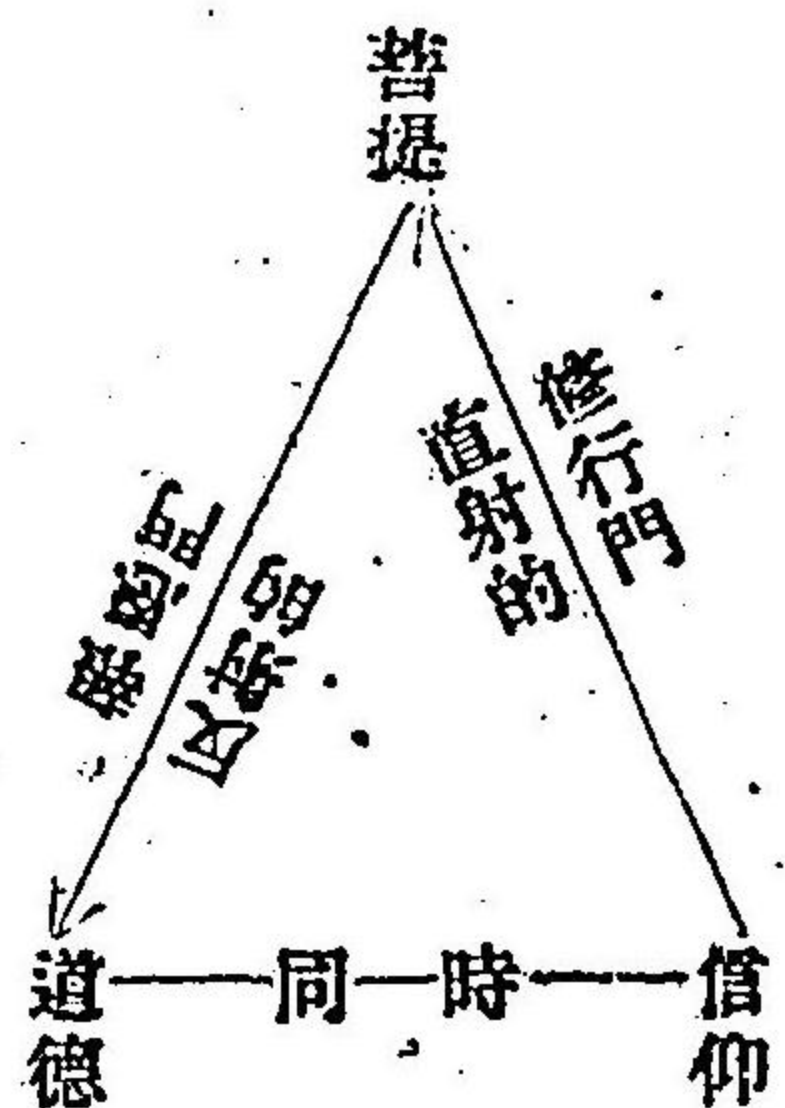
故に予は宗教家の見地よりして、信仰と道徳の調和を辯じ、信仰の關門を透徹したる道徳は、信仰に關係なき道徳よりも一段の價值を有し居るものであることを論斷して見様と思ふ。此の問題は未だ宗教家の論究し終らざる問題であつて、而も時勢の潮流は此の問題の解決を促がして居るのである。

論

聖日蓮は先づ臨終のことを習ふて後に他事を習ふべしとの教訓を下してある。之は思考すればする程妙味の含蓄するところが知れる。普通よりすれば生時は目前臨終は最後のこと故、先づ生前を學び後に死後を明めよとあるべき筈が、斯くの如く仰せられたのは實に着眼奇警慈悲圓滿と申さねばならぬ。聖祖の金言を達意的に云へば、人生の根本問題たる安心立命を決定し、徐ろに諸般の問題(道徳をも含む)を了得せよとのとである。若し此の間の消息を窺はねば、所謂醉生夢死であつて實に感然に堪へざる次第であります。

而らば安心立命は如何にして得らるゝかと云ふに、根柢的に南無妙法蓮華經を信念受持し謗法の邪念を絶ち、大菩提を證せんとの誓願は、即安心立命であつて形式的の唱題修行の如きは決して何等の價值あるものではない。今かゝる安心立命を得ると同時に、自己の因果(種々の因縁)より蒙れる幾多の境界の恩徳を感謝する報恩的行爲が忽ち激湧として、道徳行爲となつて發現するのである。今此の關係を明瞭にせんが爲め圖を以て

示さん



信仰は絕對善即菩提に達する修行門にして、信念の一行に餘事を混へず、直に菩提に徹底する直射的發動である。道徳は安心立命を發得したる隨喜の情抑へ難く、而して我が身の此の大利益を得たるは、三寶の恩によるは勿論なるも、又全く外界諸般の恩徳によるとの觀念よりして直に報恩的行爲となるのである。されば信仰の動機は益々強大なるに比して、愈々道徳の價值をなすものなれば、全く反射作用と云ふてよろしいのである。されば信仰と道徳とは、論理的に云へば前後あるも、實行方面より云へば同時である。予は之れより更に一步を進めて詳解を試みようと思ふ。

各論其一 信仰の動機(發菩提心)

聖祖が先づ臨終のとを誓へとの金言、換言すれば安心立命の根柢的立脚地即信仰の動機は如何なる意義によ

りて刺撃せらるゝかと云ふに對しては、種々の方面より解釋を下すことが出来ますか。予は常識の方面より論じて見やうと思ふ

諸君試みに人は何の爲に生命を欲するかとの問題を提唱して解決を下して見給へ。恐くは千態萬狀をなすであらふ。或は衣食住を欲する故なり。或は交通機關を發明せん。或は通商貿易を盛大にせん。或は妻子の爲。或は父母。或は國王。或は正義博愛を實行せんが爲と。殆ど際限なき有様であります。予は之等の答案に對して、絶對的に非認する譯ではない。寧ろ稱賛するのであるが、人は何の爲に生命を欲するかとの疑問に對しては、斷じて其の正鵠を得たりとは申されぬ。今其の理由を評論しますれば

人は生命ありてこそ衣食住の必要も生ずるのである。若し生命なくんば衣食住何にかせん。然るに衣食住の爲に生命を使役するとせば、生命を機械視するものであつて、既に一命の存在すら認めざるものと云はねばならぬ。妻子は愛すべきものであるも、自己の妻子である。自己で自覺心を離れては妻子の愛すべき理由は更にならない。然るに妻子の爲に生命を欲するとせば、妻子の奴隸に過ぎない。之れ固より正解と云ふを得ない。父母は我を生み我を哺育し給へるを以て、孝道を全ふするは吾人の本務であるか。人は孝を盡さんが爲に生れたものでない。若し然らずとせば、父母は夫れ自身の便益に供せんが爲子を生むと云はねばならぬ。故に自己の生命を欲する根本問題を決せざるの孝は、未だ眞の孝と謂はれぬのである

國王は國家萬民を統治し給ふと故。盡忠報國の大義を全ふすべきは勿論であるが、但に忠を盡さんが爲に生れたる者とせば、先きに述べたる親子の關係問題の如く、一種の奴隸に過ぎない。生命の眞價値を認識して

始めて國王の感恩を感せんければ眞の忠道を全ふする事が出来ない

衆生の恩と云ひ。正義博愛と云ひ。其の他幾多の答案も。要するに人は何の爲に生命を欲するか。との根本問題を解決するに足らざるのであります

予は斯の如く批判し來れば、或は云はん。かゝる學説は全く人間界に於ける諸般の現象を破壊し、厭世的觀想を惹起し、社會組織と遠離し、隨て害惡を流布する誤りに陥るにあらざやと

然れども驚くとを已めよ。是れ則ち人世の疑問を解して信仰の動機を刺撃し以て安心立命を得るの時既に到來したのである

社會國家の觀念を脱離して、一苟かに吾人生存の境界を觀察して見給へ。無常遷滅にして憂悲苦惱多く、干渉束縛已むときなく、不潔臭穢絶へざるにあらざや。故に經には三界無安猶如火宅と説いてある。されば何等かの大なる光明を見ざるに於ては、灰身滅智の消極的觀想を起し、寧ろ生命を欲するは迷ひなりとの誤謬に陥るは、敢て怪しむに足らないのである。然るに慧光照無量なる本佛釋尊の聖訓を聞くに、如來の境界は常住不滅にして娛樂快樂多く、自在無礙にして清淨無垢なりと。而もこの常樂我淨の徳は如來の獨占にあらず。吾人の如き不完全なる生命にも本來冥具せるものであつて、已顯未顯の差はあるも、其の本體に於ては違ふことないとしてある。本佛毎自の悲願は止息あるとなく、我等を開示悟入せしめ給へるとは、壽量顯本の聖訓を信讀せば、實に感涙に咽ひ隨喜の情禁する能はざる次第である。此れ即内薰外熏不思議の感應力にして、是即信仰の動機の發展せるものであります。更に之を云へば、釋尊の因行果徳は妙法蓮華經の五

字に具足するが故に、之を受持すれば自然に彼の功德を讓與し給ふのである。本佛大慈悲を起して妙法五字に無價の寶珠を裹みて、我等の首に懸けさしめ給ふたのである。されば先天内容の聲現れ信念を喚起し、本佛の大慈悲に感激し、妙法の功德力を信受し、大菩提を證せんとの向上の大良心を發揮せねばなりません。此れ即ち絶對善に達する修行門であつて、此の間餘事を混へず直射的でなければなりません。受け難き人身を受け遣ひ難き妙法に遇ひ奉るとの精神痛起して、始めて人生の大疑問たる何が故に生命を欲するか、どの眞意義を解決し終るとを得るのであります。此道義の根底より諸般社會道徳を完成せねばなりません。則上求菩提下化衆生の爲とも云ひ得べく、又信仰と道徳とを實行せんが爲とも云へ得るのである。

予は先きに常識の上より信仰の動機を説明せんと云ふて、顯示的に啓發したるは、一見矛盾の感あらん。さりながら信仰の動機は常識推究の結果として、當然生起するものであるとの意義に了解せられんとを希望します。予は更に歩を轉じて道徳行爲なるものは、信仰と離るべからざることを述べまじやう。

各論其二 道徳行爲

予が道徳的行爲とは、普通道徳を實行する意であつて、敢て高妙なる出世間的道徳を指すのではない。隨て報恩門と云ふも、三寶の恩を報せんが爲に道徳を實踐せよとの意義でもない、尤も如上の方面よりして説明のせられざる譯ではないが、今の所論ではありませぬ。

予は先きに述べたる如く、信仰の動機の發動せざるに於て、醉生夢死すべかりしものか、妙法を受持して人生の眞意義を解し、自己の價値の無限なるを認識するに至りたるは、宛然平民が一躍皇太子となりたるの思

ひがある、無量義經十功德品の説意を顯本的に云へば、本佛釋尊の慈父と、本地の妙法の悲母と和合して、末法信仰の行者を生む、猶ほ天皇々后兩陛下の愛子たる皇太子の如しと云ふてある。

今經意を反面より觀察して、道徳行爲をなさざるべからざる理由を社會の現象に比して御話申せば、貴顯なる人(下種ある信仰家に譬ふ)と、卑賤なる人(未下種の非信仰家に譬ふ)とに對して、危害を加へたるものありと假定せんに、其の罪科に輕重の差あるは事實にして、救助したる場合も亦例して知るとが出來ます。隨て高貴の人が其の恩を報ずるの義務深く下賤の人は其の徳を謝するとの淺きは實際であります。之れ畢竟自己の身分の如何によりて定まるものなるとは、争はれぬ事柄であると思ひます。驟つて吾人信仰家の境遇を考へて見るに、經に説示しある如く、非常に尊高なる地位でありますから、隨て他の恩徳に報ゆるの念も偉大でなければなりません。

抑も斯の如き幸福なる信仰を喚起したるは、三寶の恩徳によるは勿論なるも、而も自己なるものは、孤立の境界なるかと云ふに、決して然らず、外界萬象の因縁補助の力に依るとは明白なる事實である。然らば即此等の圈象に對しては、智恩報恩の感謝的行爲に出でねばならぬと云ふは、當然な譯でありて之れ予が所謂報恩門と云ふのである。そこで吾人が圈象より蒙むれる恩徳と云ふは、際限ないからして、報恩的行爲も實際無限であるが、佛說四恩の如きは極めて肝要なると思ひます。

父母の恩、吾人の貴重すべき身軀は、父母によりて生じたるものなれば、何人と雖孝道を盡さざるべからざるも、現在の父母は佛果を成するの因縁を有するものなれば、世間的孝道に於ても、格段なる注意を致さ

るべからず。君主の恩、國民は君主に統治せられ、萬民皆其の途に安ずるは全く君主の恩なり。特に我國の如きは君民一家、萬國其の比を見ざるの國體なれば、何人と雖忠報國の大義を知らざるべからざるも、吾人は絶對善に達するの幸福を有するものなれば、普通國民よりも其の忠を致さざるべからず。衆生の恩、相資相養は社會の現狀にして、衣食住の如き、交通機關の如き、其の他百般の事物、皆衆生の恩にあらざるはなし、故に普通人と雖も正義博愛の念なかるべからず。況んや無限なる自己の價値を認識せる吾人は、一層其の力を致さざるべからず。三寶の恩は今の所論に非ざれば之を略す。已上論ずる處は、但に普通道徳的行為に過ぎざるも、信仰家は信仰家としての動機よりして、道義の觀念を惹起する理由を説明したのであります。更に出世間的道德として他人の信仰を喚起せしめ、自己と同じく自他供安同歸常寂の妙境界に住せしむるは、吾人の本領なるも、今の所論にあらざれば因縁の熟する時を待たん

結論

上來辯明したる處によれば、信仰と道徳とは決して衝突せざるのみならず、信仰を有する人は必道徳を實行せねばならぬと云ふ義務がある。信仰家の道徳と非信仰家の道徳とは、良し其の形式及び内容に於て同一なりとしても、非信仰家は自己の價値を知らずして、唯淺薄なる動機より生じたる醉生夢死的の道徳なれば、

相對善に止まるのである。信仰家の道徳は、無限なる價値を認識したる高妙なる反射作用に刺戟せられて湧起したるものなれば、絶對より來りたる相對善である。故に有信仰の道徳は生命ある行動にして、無信仰の道徳は形態的の動作と云はねばなりません。されば在來有信仰の非道徳家は、可成感謝的報恩の行為を現はし、無信仰の有道徳家は、信念の動機を刺戟し、互に有信有道の人たらんとを希望せざるべからず。而して吾人の道徳は仰信と同時なりや異時なりやと云ふに、論理思辨の上より云へば異時なるも、實踐方面より云へば同時なりと斷定するのである。予の本题を講ずる原由は

感謝的報恩の行為は自己の價値と正比例を爲すものなり。その確信より發したる一波瀾に過ぎないのである。今數學の式を以て此講を終らん

- 自己の價値＝知恩報恩
- 自己×無限＝知恩報恩＝信仰家の道徳
- 自己×有限＝知恩報恩＝非信仰家の道徳

講習會雜記

◎七月廿日 晴 土曜 準備會 先づ藤澤驛より香かじめよ 名にしおふ遊行上人の藤澤寺と小栗判官照手姫の墓は當驛の名物たり此の驛にて本講習會員の多数は降りるゝなり軌路の右なる旅館には『講習會々員休憩所』との大看板は掲げられぬ番頭手代酌婦車夫の走馬の如様を紛せるを見て本會員の一時の歸來を想見すべきなり此より鐵路と水路との二便あり就中一棹高く柳塘を廻りて水紋遙に露師の楫歌に涼風を乗せて降る人多し 露師御旅館は龍口寺門前海老屋を以てし青樓銀樓若少婦は確かに新輸入の頗揃なるべし

るのみ山門の側に 聖祖門下専門及期講習會々場と掲げあり其のそばに日割表あり
廿一日 午前開會式 午後 講演 夜分幻燈講話
廿二日 全 講演 全 交名會及演說 夜分幻燈講話
廿三日 全 全 全 討論會 夜分幻燈講話
廿四日 全 全 全 書函及茶話會 夜分公開演說
廿五日 全 全 全 探源演說會 夜分幻燈講話
廿六日 全 全 午前 十時出發鎌倉 旅行
廿七日 全 全 午後 討論會 夜分幻燈講話
廿八日 全 全 全 科外講話 夜分公開演說
廿九日 全 全 全 江之島國覽大紀念寫眞攝影 午後大懇親會
三十日 全 全 閉會式

「祖國研究の各方面」 本多日生師
「攝折論」 田中智學居士
「本化別頭の教觀」 田邊善知師
「本學論」 中村孝敬師
「玉澤日曜上人逸話」 藤田鶴傳師
「信仰と道徳の調和」 今成乾隨師

山門を右折して大歡迎門は開かれぬ清風曉曉の緑端を甜めて關々たる所に入口なる貼紙あり靴下駄草鞋等洋新舊雜然として列べられ直ちに左の掲示を讀むべし
本會は嚴正なる秩序を保持せむ爲め左の規定を制す
○會 規
一會員は法服若ば禮服(羽織袴或は洋服)の外講堂に入るを禁す
一來會者は直ちに事務所へ届け出て會費を納め會員之證を受取べし
一本會は宗教的會合なれば會員は凡て信譽的に行動すべし
一本會員は講堂に入る時は嚴肅の態度を以て聖儀を禮拜すべし
一聽講者は講演の始終に於て露師に對し敬禮を爲すべし
一講演中は靜肅にし威容を正し決して喫煙談話又は狼に行動するを禁す
一聽講者の質疑をせむとするものは閉講後係員を経て爲すべし

○起居の定則

前五時 起床(擊柝) 前六時 朝飯(擊柝) 自七時至十時 講演(半鐘) 正午 餐食(擊柝) 後六時 晚餐(擊柝) 後十時 人員點呼及就眠 一定期時間外に飲食等を爲し又會場内に飲食酒等を嚴禁す 一各月の携帶品は自治的に保管し亂雜ならぬ様に整頓すべし 一會員中疾病の生ずる時は直に事務所へ届け指定醫師の診察を受くべし

○罰 則

前後の諸規約を破り會場整理の妨害と認むる時は委員會議に依り退會せしむ

○會 堂

禮堂 (正面大床に聖祖の御影を掲げ講壇黒板筆記席あり) 講師休憩室 特別會員席 贊助會員席 會員席 (居室寢室食堂等を兼ね)

其他寢室寢室洗面所便所非常用器具等は劃然として設置完備せり 借て敷本日夕刻より會期十日間の最も貴重な

る時間とはなりぬ則ち七月廿日夕刻より来る廿日午刻に至る之れなり此の間は人生の最貴最重なる生命權は確かに本會委員の掌中に歸したり生殺は唯だ是れ其の榮榮の影するが儘なりされど一乘團頓の妙行者身輕法重の聖運圓満なる健康を保持増長せしめんと欲するは此れ實に我輩の至希至望なり爲めに本會の經費の最高額は實に本會員の生命でふ二字の爲めに消耗せられたるかを知らば以て如何に本委員が觸筆を遺般に分せるかを解せむ

本日來會の届出ありしもの田中本多田邊の三講師本會理事十名贊助員加藤、保坂、山川の三氏會員大橋、貫田、桑原、増本、石橋、能仁、久城兄弟、中込、山海、瀧口兄弟、森、土屋、中村、島河、福島、片野、伊東、水野、林、吉岡母子、江崎、加藤等の諸氏及品川方面の信徒等なり

◎廿一日 快晴 日曜 開會第一日 緒々たる火矢は滿天より直射す炎々たる熱釜は滿地に沸騰せり實に今ま三界は火宅を實現しつつあるなり此の時に當り綠橋樓として冷風を

吹き危水飄々として深窓に懸かる所飛閣險崖に躍跨し朱欄綠陸に圍繞し洋々たる大海原の水波煙霧を望むで悠々天界の高氣宇又頗る高爽なる別乾坤に一乘至妙の大踏踏を開く此れ豈に時ならずして何ぞ、午前十時第一鐘にて露師及諸會員等は何れも肅然として定席に著き第二鐘鳴るや左の如し

○閉 會 式

式辭 中川 觀秀 贊助員總代挨拶 加藤 文雅 祝詞 藤原日進僧正 祝文 小林日童大僧正代讀 山田 一英 全 風間大禮林教頭代讀 全 津田源一郎氏代讀 全 津田源一郎氏 祝電 井上圓了博士 小笠原日毅氏 津田源一郎氏 田中智學露師 田邊善知露師 本多日生露師 萬歲三呼 保坂 智宙 舊禮配布 『日本國之宗廟』『宋法之大學』 (11)

各百部宛、獅子王文庫寄贈

茶菓配布

今諸大家の風潮を左に抄録す

祝 辭

備香會員の發起に係る第一夏期講習會は、愈來二十一日より開會せらる、予先年已來疾病に罹り其席に列することを得ず、依て一言以て賛同の意を表す、各位異体同心の風潮を幸じ、各派特得の妙法を吐露して、益祖風を扇揚せんことを庶幾す、

大禮林長 小林 日董

祝 詞

浦ちかき磁上ヶ原に駒とめて片瀬の川の沙干をそ待、とは鴨の長明が囃放に詠じたる歌なり、歸り來てまた見ん事も同瀬川濁れる水の澄まぬ世なれば、とは中務卿宗尊親王御臨京の時の御歌なり、左れば固瀬の古蹟たる替く衆庶の口碑に残る處なり、又龍口の名鶴は、古記曰く欽明天皇十三年江島神社の靈感に依て一身五頭の毒龍惡念を轉じて仁惠の明神となる、是則龍口神社の神林にして此神の靈應に依て罪人斬断の刑場

國にも法の光の輝くことを願して、聯誼會をもつることにはなりぬ

龍口寺沙門 藤原 日

夏むしを燈しに代へて研げ人

御法の玉のひかり出るまで

隨喜の詞

越に本月日本を以て、備香會青年諸君の發起によりて、龍口の靈場に於て妙宗各派合同の夏期講習會を開始せらる、其意たるや、聖祖の門下を一室に會し、且く各派教義の小異を置て大同に就き、互に胸襟を開きて所信を披瀝し、進ては將來に向て更に各教團林の機關雜誌を發行し、又は共立の妙宗專門學林を設立し、異体同心の聖祖に基き、倍一致和融を旨とし、本法廣布の術を講ぜんとするにあるが如し、爾ら此舉たる遠大の希望を抱持せる妙宗未會の一大美舉にして、本日の發會は之が呱呱の一聲を擧げたるものと云ふべし、妙宗の編纂誰か之れを贊し之を祝せざるものあらんや、余や發起者諸君より本會講師の末員として推薦せられ光榮大なりと雖、故ありて

發會する能はず遠慮限りなし、依て隨喜を稱し、諸君に一言を寄せて隨喜の意を表し併せて本會の悠久と希望の眞途とを祈ると云爾

明治三十四年七月二十一日

風間 隨喜

而して本多、田中、田邊三講師の祝辭はひとしく、此講習會が備香會に發起せられ各派同志者の手によりて成れるを欣び、是に依りて各派統一の端緒を開き、進んで佛敎統一の聖業を成就せん動機を作るべき好箇の現象なりとて、聖祖照鑑の下に不肯作ら本化宗風の要領に一道の光明を供へ諸君と共に異體同心の風潮によつて一齊に闊洋廣布の聖業に直進せんとの意味にて、祝意を述べられたり

せん

斯くして嚴肅に而も和氣藹然たる中に無限の希望を孕みたり當時通信員は『日宗』紙上に「實にや萬歳三呼せし時は其聲天地を震撼し山岳を六動して日星爲めに搖く床にかけまつれる聖像を見奉れば、大慈悦の色を現はし

講習會 雜記

玉ふ飛禽走獸も啼き留め暇が山樵漁夫までも網鮎投けて隣隨聽せり」とげに然なり我等も唱び皆に唱題せると幾許ぞ特別席には藤原僧正中野文範師藤田日進師等あり傍聽席には學生信徒等二十有餘名總數約八十餘なりき

本日入會者砂田宇野安藤夫婦等なり午後

◎講 演 (第一回)

第一時 本化別頭の教觀 田邊智知講師
第二時 祖書研究の各方面 本多日生講師
第三時 攝折論 田中智學講師
講義の終る時文學博士井上哲學館主は富山縣巡回先より無爲なる祝辭と不幸欠席の旨を述べられ發表にと金圓を寄附せらる委員感謝の旨を報じ及び小笠原科外講師老師病癒の爲め欠席の旨を報告しぬ此より七時半までは白砂青松間の天然の風光と海水浴との時間なり

◎寫眞應用宗史談 (第一回)

田中講師談

講堂燈じて幻燈室となる機軸は精美凡て活動寫眞を見るに等し殊に考證的宗史眼を以てせらる、博識なる講師が百挫不折の堅忍より成れる寫眞畫跡の攝影を無礙辨もて熱誠を籠め

たる慷慨的演明には指者地を踏て立ち壯烈鬼を泣かしむなり其の寫眞版の名目は

- (一)小港臨生水、(二)全山門、(三)全本堂、(四)蓮花が淵、(五)妙慈寺御前、(六)清澄山瀧溪石、(七)全虛空藏堂、(八)全山靈寶宗祖御親箱及篋笈、(九)旭ヶ森、(十)白蓮花日興上人書立正安國論なりき

時二十時近かつきぬ人名點呼の後には蚊帳吊られ輕床は展べられ人は安く横はり夢は國かに他界に向ふ

◎廿二日 晴 日曜 (第二日) 殘月淡く樹梢に傾く時徐に門を徹すれば曉雲露て形を數め霞を含める陌頭の楊柳未だ梳らざる曉起の容ほの、明け行く東雲は鏡の如く澄み渡り危しき禽鳥啼て堂に入む計り時に曉起海浴の功徳を説きて皆に友の眼を醒して羽衣纏ふて歸り行く人あり斯くて第一第二の擊柝は豫規の如く鳴て

◎講 演 (第二回)

は規定の如くありて講演は皆な總論を終りて明日よりは本論に進むなり特別席は前日通り來會者の芳名は賛助員席に神代岸の二氏會員

(111)

席に中村毅、中原村上の各士等聴者は十餘名を増し午後二時より

○交名會

初も會員たるものは皆な悉く一堂に會統し座長の指名に依りて「某君」と呼ばば應と答へて立ち動くも下の事項を述べべき約なりき本貫、現住、姓名、職業、特色、主義、信仰の七項を問題とす僧侶學生官吏教員商人等の和洋新舊の混淆團體は或は前岸より後岸に飛翔し右縁より左側に轉轉して七十有餘回も轉がり角然眞摯なる態度、圓然滑脫なる風彩商人的趣味に映然吹き出すあり説教口調に閉込られて深ぼくなるあり興味頗る津々なりき藤原僧正より奇蹟の片瀬名物の饅頭五箱を囀りつゝ後には會員相互の

○席上演説會

に變じ時間の都合として一人前の廣長舌は十五分の短時間なりき斯くて后三時十五分より理事兼田頭秀君は桶香會の由來を述べ、序で増田君の新體詩朗讀、保坂君の快舌、山海君の中國訛の靈門教理の宣布、伊東君の滑稽談、中原君の洒落談、土屋君の眞摯的、桑原君

の語學者的、能仁君の哲學的は皆々破天荒の勢を以て天稟の雄舌と思想の蘊蓄との披露には一座を變動せるの風彩ありき散會の後には海水浴の快を採る人第四の鑿橋の聞て歸入る人などありて後七時半より

○幻燈明宗史談 (第二回)

は昨夜の披露と入場券を頒布せる爲め來觀者避暑學生保養の都人士淑女夫婦仲々に見ゆ、寫眞題目は伊豆篠海浦伊豆日蓮時(一名祖岩)全海岸山蓮看寺尾川名上原彌三郎岩窟同川名蓮慶寺同寺内彌三郎夫婦同伊東佛現寺門前同寺本堂同佛光寺門前同本堂伊東朝高同基同像伊東柏時小湊誕生寺靈寶假名付御消息等也最後の御消息の特に寫し出されむとせる前に當りて田中講師は最も嚴正なる音調にて如何に偉大なる聖祖日蓮大聖人は末法五濁の衆生を憐み玉わしかば強者に對してや文々皆な説て百練の鍛となり柔者に向ふては譬々至摩春風の如く珠に女人禁制の不平等を如何に打破し玉しかよされば此の偉大なる聖徳の御玉掌に接する時は何人に限らず嚴格なる最敬禮を爲すべしと一座皆な敬順しき

本夜石橋君の發願に依り左の講動く「吾人此の神聖なる講習會に列し滿堂の諸君と相會するを得るは偏へに聖祖の御遺徳によるべけれど亦た桶香會の發起諸君が熱誠に依らずんばあらず然るに今吾人は三度の食事より床の始末座敷の掃除等に至るまでも御厄介になるべきは贅澤はさてなき聖徳の御前にて實に忍びざる所なり願は當番五人を順次として以て發起員の業務を助け共に共樂を願はん事如何に」と滿堂可決即ち明日より施行實執す斯くて最後の拆は鳴りぬ

○廿三日 快晴 火曜日 (第三日) 鷓鴣第一番を告ぐる時は點滴たる松を浴びつゝ露けき白砂にわ誰家の愛人の跡とも知らず水天鬢鬢海波を望むて八重の潮路に今朝も變らず身上出水を爲す人は帯々色附きしも理り第二鐘の鳴るより

○講 演 (第三回)

規定の通りなる三講師の講義は皆な本論の大綱に引締められて眼目沈思小首傾く人多く見ゆ本日午後一時より會員山川藤原君等數名は明晩の公開演説を披露せんとて旗鼓堂々片瀬

腰越江之島等に遊説せられぬ夫れより午後二時に

○討論會 (第二回)

撰頭三條目あり一四個格言、二智識と信仰三、佛耶兩教の優劣、之れなり三者何を振ふべきかを起立に問ふに第三案は遂に多數を以て論題となりぬ座長は岸巖妙君なり山田林の兩氏は書記官に會員三十三員なり其の始まるや遊説の如く巨砲の如くなりしか五番今成君の佛敎最優論に對する三番の能仁君の基督教優勝論との一衝突は案外にも優勢にして一撃以て五番の砲臺を崩壊せんとす時に廿八番中川君の佛敎哲理の一砲に十二番清水君の應酬にて主義は側面に移り廿六番桑原君の佛敎觀に三番の逆襲八番花房君の援隊三十一番の突貫隊には基督教大に優勢旗を劈し將に一尋肉薄佛敎の牙營を屠らんとする吶嗟廿六番五番廿八番の奇軍潛隊一時に劍戟鋭き突襲に基督教無慘や敗敵取めて退退せり座長は猶ほ公斷に決せむとて採決す耶教に賛せるもの九名更に佛敎に賛せるものを問ふ時には不思議や滿堂は遂起立にて先きの耶教賛成も今は直ちに變節せし

ぞ笑止千萬萬讚唱へて散會

○幻燈明宗史談 (第三回)

其の高出せられたるは小松原法難地(日隆上人墓)、全裝掛松鏡忍寺御手植の松、上人墓(妙隆院日玉上人墓)、小松原御寶物、創洗の井戸、天津日蓮寺、岩高山、與津妙覺寺、坂本岩窟、笠森觀音堂、蓮原妙光寺慈門、同山門、同本堂、同蓮原兼綱墓、坂本法花寺、同日向上人墓、蓮原寶物向師筆跡、高祖御用鞍の活寫なりき

特別席は前日の通り會員席には猶ほ科外講師今成乾隨師本日より來會せらる

○廿四日 晴 水曜日 (第四日) 鷓鴣第一番を醒まさして諸惡莫作衆善奉行と響波せる

ときは此又凝光の麗なるらむ靜かに一軸の經卷を繰れば蝴蝶舞ひ蛙躍る餘るに彼等の私語を聞け皆な妙法を唱ふなり岩間に漁る赤蟹さへも其目は天界を望むなり

○講 演 (第四回)

櫻報の如く三講師は熱心に辯せられぬ講義は益々其歩を進めて恰も三百山句の險難要道より雲煙縹緲の間に遙かに寶城を望が如き觀あ

らむ本日の午後は昨日の攻城野戰の大活躍後四海波を靜めて悠々管絃簫笛の妙音を石山寺より聞くが如き雅趣温備なる

○書讀會、茶話會及「麻直集」記録會

は開かれぬ前者にては幾々たる志氣の美的才能が渴乎として飛龍の如きかと思れば躍然として猛虎の如く神韻の機妙を見後者によりては(麻直集とは田中講師の命名にして祖書の所謂麻園に入るものは直しとの語源より來れるもの)會員諸氏の心的寫眞帖となりて無價の什寶と成りぬ其の中者にありては濃厚なる情操の甘き所る溢れ各々其の意氣を吐て又功名を論ずるものなし本夜七時より

○公開演説會 (第一回)

を開く會場は實に龍口寺の祖師堂なり此の舉たる當に會員相互の修養に充つる而已ならず實は大衆傳道以て萬民をして善れく法味に浸潤せしめんが爲めなり聽衆は會員九十餘名の外に二百五十人餘なり其の演題と辯士は

- 開會の辭 柴田 顯秀君
- 南無の説 保坂 智宙君
- 聖祖の統一主義 能仁 事一君

回光一輝頤頤の真相 一 神代智明君
◎廿五日 晴 木曜日 (第五日) 會期の十日間は本日已に半に過ぎければ會員中出入の多少はあつても多くは前半期より後半期に通じて延期の出願者の多きは此れ偏に講習會なるものゝ趣味を領解し來りしものならむ第五日目の

○講 演 (第五回)
環規の如く田邊本多田中三講師なるが本日の田中講師は已に定時を越ゆる事四十分餘報鐘の鳴るも耳に入るべきかは既に覺に聖祖を去るの逸き宗學の風調、氣概なき宗家の門勢、時事の頗る非なるを憐きて講師大に泣く一室の幽衆豈に動かさむの一座聲を吞むて悲風悽愴天日爲めに曇る噫々

○探題演習會 (滑稽演習)
は依例午後二時より開かる其の様式は環規番號の抽籤ありて號を送つて登壇し壇上にて又抽籤法の題を探ぐるものなり開くや否や流辯滔々撥擲無礙に離れ來り辯じ去る其の空想の奇其の推論の接連座をして舌を捲かしむるの法なり此の頃刻の間に起る種々の感想は或は

一言半句にして黙して頭抱へて逃ぐる人あり或は堂々數百言強附會の概を爲して腹面なき人あり斯くして過つる頃に言論偶々嬉波に失したりとて大に立腹せる人ありて會場の神聖を汚漬(出題者の辯論の範圍を定めざりしは手落ち)せりとて中途にして解散となりぬされども間もなく融解して萬歳唱へて散會せり同夜は

○祝明宗 史談 (第四回)
は例に依り中山々門、同五重塔、鬼子母神堂、祖師堂、根本法花堂、同寶殿、同泣銀香樹、眞間の總檣、同手見奈社、同本堂、同寶物、常師御消息、玉淨寶物兄弟抄、同やうやく御消息御眞筆、等にして會員のものば五十餘名の人ありき

◎廿六日 晴 金曜日 (第六日) 本日の田邊講師要用ありとて昨夜歸京せられたれば其の時間は日宗大僧林長小林日蓮師の「大受茶編私考」を同林教授中村孝教師の代讀なれば本日の
○講 演 (第六回)
第一時田中講師、第二時中村講師、第三時本

多講師と定まりの田中講師は講演后直ちに歸邸せらる蓋し本日の鎌倉旅行を待受てなり

○鎌倉祖殿参拜の修學旅行

は抑も本講習會中の最趣味の美學なり十時三十分整列の令は發しぬ昔な勇氣を滿面に堪へて意氣軒疎なり人員點呼を行ふ數へ來れば六十有六蓋し此れアルプスの最險山をも飛越せんずる一騎撰の撰抜隊のみ稱して一大隊と云嚮導兼史跡説明員は山川君之に當り軍司令官は即ち山田君なり威風四邊を拂ふて第一軍青年隊血氣無双絶倫を誇る第二軍は神色自若憂怒色に顯はれずなり第三軍は暗に隈備若は衛生隊を擬するか婦人さへ見受けぬ其行進隊は腰越津村より太平洋の海濱に沿ふて七里ヶ濱行合ひ川に至れば亭午に垂とす趣味ある茶寮に行厨を傾け熱砂を踏つて懸山ヶ崎袈裟掛松より極樂寺に至り當日の案内役なる山川君の沈痛激切なる口調を以て文永越治の古をしのび聖祖當年の法嚴其觀を説き至るや意氣軒昂一行益奮ひ星月井長谷觀音大佛より四條金吾の舊宅收支庵より宿屋光則寺の明師土牢に賣し久遠傳一巻を涙ながらに讀誦し明師の當年

を追憶しぬるは將士また大に涙ありと云ふべき也寶物の拜觀と茶菓の饗應を受け次は栗山の田中先生の庵にとかりぬ鶴山の上なる歌迎旗は笑ふて一行を招き奇想を種める築造岩珍草の庭園には竹影箇々たり氣魄更に高崇を覺ゆ先生の親しき款待に割き難き愛を遺して萬歳唱へて壽福寺圓覺寺建長寺に押し寄せ一代の驕りを極めし八幡宮を拜しては斯く崇大の大領守の禁杜下に裸馬を繋いで睥睨一番「如何に八幡」の大壯觀を追想し其より小町妙隆寺の鑄冠親師の此跡を拜し辻説法の靈地に詣て大巧寺本覺寺より比丘ヶ谷妙本寺に参り大學三期目學上人の墓に其し現住中野文龍師の非常の厚遇を受け進みて常樂寺の牡丹餅の舊地より安國論寺に詣ては安國論師製作の岩窟に崇高の感に打たれ小島存吾師の茶菓の饗を受けし時は晚鷓鴣を求め松間に漁火の飛ぶを眺むいざ此よりは凱旋路にとましかり銀光滴る七里ヶ濱を吟行歌歩漫々として行合川に戻れば沸々たる晚鐘一行を待つて舟久さし月と波とをば地走に響まどろしと嘯付きぬ太平樂を謳歌しつゝ嘲哂乎として凱旋門

なくぐりしは後九時二十分なり

◎廿七日 曇且少雨 土曜 (第七日) 日光靈影相參差し一過の驟雨神爽爲めに悠々海光更に歌麗なり

○講 演 (第七回)

は愈微妙幽玄となり來れば一疊の思想も益々精緻となりぬ田中中村田邊三講師の總論の後には科外として今成講師「信仰と道徳との調和」に就て所述あり終つて午後二時より

○討論會 (第二回)

を聞く論題は「佛教の慈悲と基督教の博愛との優劣論」なり此の會に斯様の問題に必ず衝突すべきものと見ゆ立敵共に座を對峙す座長は保坂君を指し奇警の論鋒痛快の辯論突飛の流舌熱誠の劇論意氣相磨し論駁相ひ錯す頗る考證的なるあり熾に現實的なるあり例に依りて萬歳聲中に佛教を謳歌せり散會の時餘興として福引あり材料は「日本國之宗旨」、「末法の大導師」、「北友雜誌」、「菩提の樂」等なり何れも奇附書目なり

本夜飛電あり本多講師の北堂病篤し急行姫路に歸らるゝとして一場の演説ありて其講演の結

論とせらる言學養に關す發奮な感動す

○幻燈應用宗史談 (第五回)

は例に依りて開く村の領守祭にも拘らず傍觀者の増加は常に滿ちぬ講師の熱誠の爲す所ならずんば焉ぞ茲に至らむ觀者皆な涙に咽ぶ本夜を以て幻燈會を終末とす噫此の映寫の爲めに師の勞また幾許ぞや村松海長寺、同寺改宗當時什寶、菑山江川家邸御面、同正面、菑山本立寺、江川日久菴、寶殿妙國寺、同日菴々淵、同上人墓、玉澤妙法花寺總門、同御面、同支關、同鐘樓、同日昭上人墓、同寺寶寶御遺物古鏡、同聖祖御手盃盃、同御眞筆入墨、同眞筆註法花經、同撰時抄、同兄弟抄、同靈祖御肉體等なり

◎廿八日 曇且晴 日曜 (第八日) 夜來の

暖氣は尙ほ雨の不足を嘲らけむか連山雲を吐て更に奇峰を操り白雨霹靂と共に落ち洗ふて奇き樹々の緑り浪音高く碎ける湖の白き皆な是れ菟光山の戀態なり

○講 演 (第八回)

は例時の如く中村田邊田中の三講師に依りて無限絶大の法益は愈々佳境に進み神龍隱寂の

妙界に暫入して如來秘密神通之力に憧憬し同
化しぬ午後は臨田總持師の

○科外講演

として玉澤日暉和上の選話あり同時に同和
上の遺稿なる「安心立行篇」「念法久住篇」の
和製の本本を施贈せられたり時に霖雨は全く
曇る

○公開演説會

閉會之辭

如來之使

宗教史發展之過歎

國体とは何ぞや

鎮守祭の爲めにと埒り来る近郷近在の老若連
も甘露の一味を掬せむとて詰寄する堂内は已
に滿座にて入るを得ざれば朱欄に膝懸かけて
聴聽するなど盛會とや云はむ

○廿九日 快晴 月曜日 (第九日)

○講 演 (第九回)

は例刻より鐘の響に引しにられて我れ連れじ
と堂に入りぬ田中講師より中村田邊の二講師
となれば愈本講をもて流通結縛分に進みぬ聽
衆の心鏡今や慧燈一實圓頓の妙蓋に上りて

山田英源君 田中義海君 井日善叔君 山川智恵君

四方を見渡せばあら面白や世界は皆な寂光」
てふ眞如界に談笑せん才心地なるらむ第三變
橋の後は

○江之島瀧窟及大巖海水浴

の日程に入りければ思ひの輕装雲衣を引き纏
ふて笠大の蓑蓑帽子を阿彌陀に擔ふて瀧窟を
舒清を踏むて躍り行く江之島々上の奇觀を盡
せる後には有名な岩窟の辨天にと穴を探り
富士に通ずる穴に驚き種兒ヶ淵の錢探りを見
ては此は魚が人となるにはあらざるかを疑
がひ螺の殻燻燻めては正宗瓶もて下戸を叩け
り踏魚櫻の幽地を荒せる得意談員細工購めて
誇る人西洋人の眞似遊ぎして鹹水飲かて苦む
人等は皆な歸賓の一つ話なるべし

○三十日 快々晴 水曜日 閉會日 所有宇

宙の妙態を觀じ來れば暗れ去り陰り來疊りて
又快く暗る暖しと嬉くみし水蒸氣も涼風暖よ
ぐ松露と化す皆な之れ妙法の奇觀たり

○講 演 (第十回)

定時となるや田中講師の攝折論も愈終講なり
て完かりぬ結願化益の文を拜讀せられて後ち
は龍口寺寶物の拜覽となり其の尤なるもの入

大觀王の旗八族、鍋釜本尊龍口法縁の赦免狀
等の説明を述べられし後は臨田僧正の演説あ
り既にして前十時なり

○閉會式

式辭 發起員總代 井日善叔
謝詞 講習員總代 伊東喜三
宗歌 (御詠歌)八雲學合 田中講師
奏 (起立鼓歌) 萬歳 總起立滿堂齊唱 山田一英
左に田中講師の結願文を掲ぐ

講演結願文

別頭の三寶高祖大聖主其慈願納知見證識し
玉へ 茲に弟子某某等淨願を發し大に同門
の四衆を會して本化別願の深義を詳説し奉
ること一句御門入本多日生は別頭開顯の
倫理法門を御門人田邊善知は本化別願の教
觀法門を御門人中村孝敬は大覺茶禪法門を
御門人臨田英傳及今成乾顯は科外講演各一
則か 御門人不肖弟子徒蒙慈日謙は別頭攝
折法門を各々至願の道念に住して正に講演
し畢ぬ聽者快く善利を得て信解増益の慶を
受け説者廣く佛乘を讚して護持正法の志を
致す還來の運に際し宗風繁微の日に在りて
此大佛事を作し以て法光啓運の佳會を現前

せしめたること誠に佛祖の冥導弟子等の微
信を馳け玉へるに山らずんばあらす百龜の
寡衆の慶何を以て之に過ぎん 三寶高祖
願くは此佳會の淨縁をして五十展轉増益不
盡の妙利あらしめ是れに因て祖道の復古を
實け全宗の氣脈を一貫し法門の高妙を證し
以て宗風扇揚の實を全ふせん唯大慈冥磁を
垂れ玉へ

南無妙法蓮華經

明治三十四年七月盛 夏講會結日

田中智學 敬白

左に伊東氏の期讀せられたるものを掲ぐ

謝 辭

龍の口の山高ふして寶相眞如の日輪輝き、
江の島の海深ふして本有常住の月輪澄め
り、此山水明媚の勝區を擧げて、日蓮聖祖
門下夏期講習會を開くと旬日、今や本會を
閉ぢんとするに當り、不肖三會員賸氏一
同に代り、聊謝辭を述んとす、夫此開會中、
三伏の暑燃ゆるか如くなるにも拘はらず、
各講師閣下は日々大法を講演し、吾等の心

講習會 雜 記

田に甘露の法雨を注ぎて、身心冷風の内に
包まるゝの思あらしめ、衆生成佛の直道を
與へられにき、幹事諸氏も亦此大法を受け
得らるべき講習會を興して、吾等を導きた
るのみならず、其間茶話會等種々の餘興を
備ふして飽かしめず、且起臥飲食の事にま
で、おさ々々至らざる所なし、然と雖此法
を開き此樂を得る所、凡庸の俗界に於てし
たらんには、猶多少の遺憾もあるべきに、
そも此地たるや、宗祖當身の大事を發揮さ
れ寂光の淨土なりと、命名し玉ひし所に於
て開かれしは、當山主人が此靈場を借さ
せ給ひしに依ればなり、此の如くにして此
十日間は、會員一同父母所生の凡縁を、靈
山の淨土に置き、教主に咫尺し、宗祖に親
近し、妙談高論を各自の方寸に收めて滿
らすことなし、されば閉會後の吾等は開會
前の吾等に非るなり、於此等は末法に生
れて題目を唱へ得るさへ、宿願深厚なりと
思ひつるに、又此會に入りて此いみじき果
報を得ること、各講師閣下山主人幹事諸
氏の賜と云ふべし、本日閉會の式を擧るに

當り、何に依りてか之を謝すことを得ん、
不肖學なく才乏しく意餘りて言葉たらざる
を如何せん、こゝに生死長夜の闇を照され、
無明煩惱の雲を拂ひし、本會の慈恵にくら
ぶれば、日輪輝く龍の口の山もひくかるべ
く、月輪澄める江の島の海も淺かるべし、
との一言を述べて謝辭となすのみ
明治三十四年七月三十日
會員總代 伊東 三

閉 會

會員總代 伊東 三

斯くて最嚴格に最神聖に至高至聖至潔至美の
第一夏期講習會は終りぬ直ちに正装の儀龍口
寺山門前の石階にと集まり中原寫眞技師の
○紀念撮影(卷首所載)

は永久に天壤と共に窮なし不幸にして此の中
に洩るゝ人多かりしも而かも百餘名の一團は
永く吾人の紀念となりぬ茲時明治卅四年七月
三十日前十時三十分此より加藤神代保坂能
仁井口の各氏の合議に依り本日午後一時江之
島岩本樓上にて

○講師慰勞大懇親會

は催されぬ田邊中村藤田田中の四講師と會員

職員實に六十五名なり...

○第二回夏期講習會決議案

- 一 明年も亦夏期講習會を開設すべきと
一 講習會を以て復發起人とす
一 現賛助員は繼續して賛助し、更に相勸誘して賛助員を増設する
一 現講習會員は來年度の勸誘員たるべきと
一 明年度講習會の期日及場所は發起人の提案に一任する

此に列せざるものには各相通知するも...

田邊春知師

宗學に精通し夙に宗風の頹敗を悲み殊...

小林日蓮師

博覽強記台當及諸宗の教學に通じ資質...

又特に隨喜出席せられ一場の科外講義を爲し給はりしは

祝の聲は高く梵天を震動す、江の島も亦流れ出てなんとし...

藤田覺輝師

相模國愛甲郡上依智村本山妙純寺住職...

- 又巻頭次に掲ぐるものは之れ賛助員及發起人等の係なり
今成乾師
相模國鎌倉郡上飯田本興寺住職 藤田本法
華宗大學林教授
又巻頭次に掲ぐるものは之れ賛助員及發起人等の係なり
今成乾師
相模國鎌倉郡上飯田本興寺住職 藤田本法
華宗大學林教授

處、此の事、讀者諸君と共に、永く永く胸裏に存せしめん、南無妙法蓮華經

我等は永遠の記憶と崇敬とを持續せんが爲めに...

田中智學居士

篤學深信曾て宗門の衰微を憂ひ憤然染衣を脱して...

會の爲に終始盡力したるは

- 井口善叔 東京市淺草區北清島町 常林寺住職
林文貞 相模國愛甲郡上依智村 妙純寺内
花房日秀 東京市小石川區白山前町五十 一新井氏方
加賀美玄和 東京市麹町區麹町六丁目十一 江崎氏方
神田眞道 東京府北豐島郡板橋町 宗仙寺内
中川觀秀 東京市淺草區田町二丁目二九 小椋氏方
山田一英 東京市四谷區富久町修 行寺内
山田英源 東京市下谷區谷中目暮里 本行寺内
秋葉顯正 東京市下谷區上根岸町九十一 齋藤氏方
柴田顯秀 東京市牛込區橫寺町 圓福寺内

專門夏期講習會
有志補助連名表

金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金
貳貳貳貳貳貳貳貳貳貳貳貳貳貳貳貳貳貳貳貳貳貳貳貳貳貳貳貳貳貳貳貳貳貳貳
圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓
也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也
十
錢
也
龍
加口江橋慶磯石橋功本高妙杉川中小宗大止近河脇久豐日中阪師池藤
藤寺上山 村崎橋 刀橋橋行野合原泉務橋宿江瀬田保永宗體安子上原
隨 久印松 寺伊芳 院林有 田 新林國王本
日身勝兵 大勇幸行日發寅信兵次福日職職志正智魏日日報職會文門日
塚中飛衛寺非道吉員慈全吉徒南耶藏慈員員者瑞安櫻龜其社員員庫寺迦

講
習
會
雜
記

金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金
壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹
圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓
也也也也五五五五也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也
十
錢
也
也

田中庄井兒中谷津花松佐田清整大干加及法本山長大小川橋西宮谷布伊 眞酒鷺金中
中里司上玉野中田房森野中水月岩野藤川 谷谷久世住本尾田中施東名井塚子野
泰日宗國禪顯乘日日羅文日龍日之次日眞 法本寺海在練全泰光支日 義日次厚文
子勝七了戒明寺諫秀運高齋山諫助那摩能寺寺寺十テ壽壽中嬰岳寺顯規英慎那山親

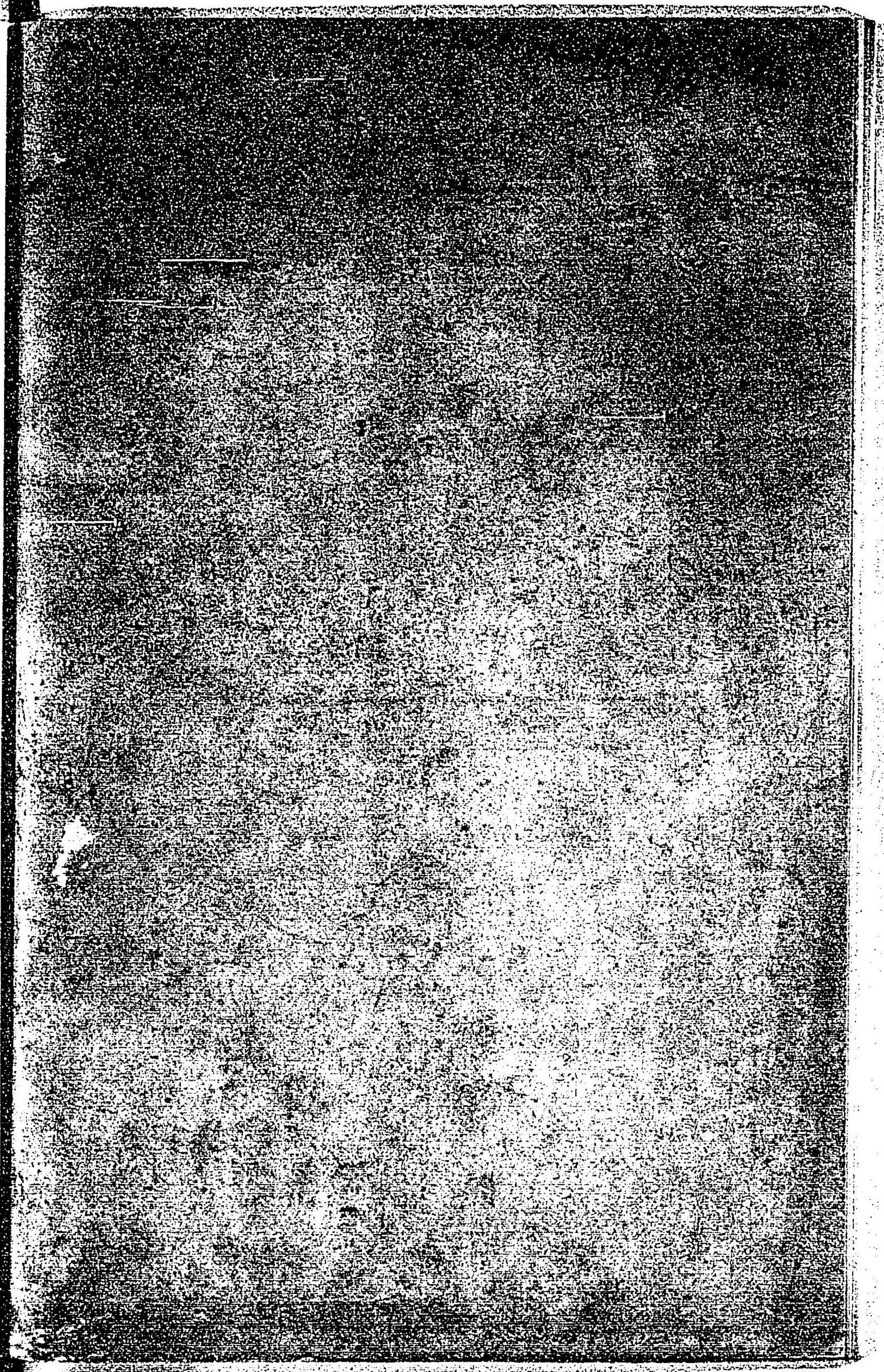
金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金
壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹
圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓
也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也

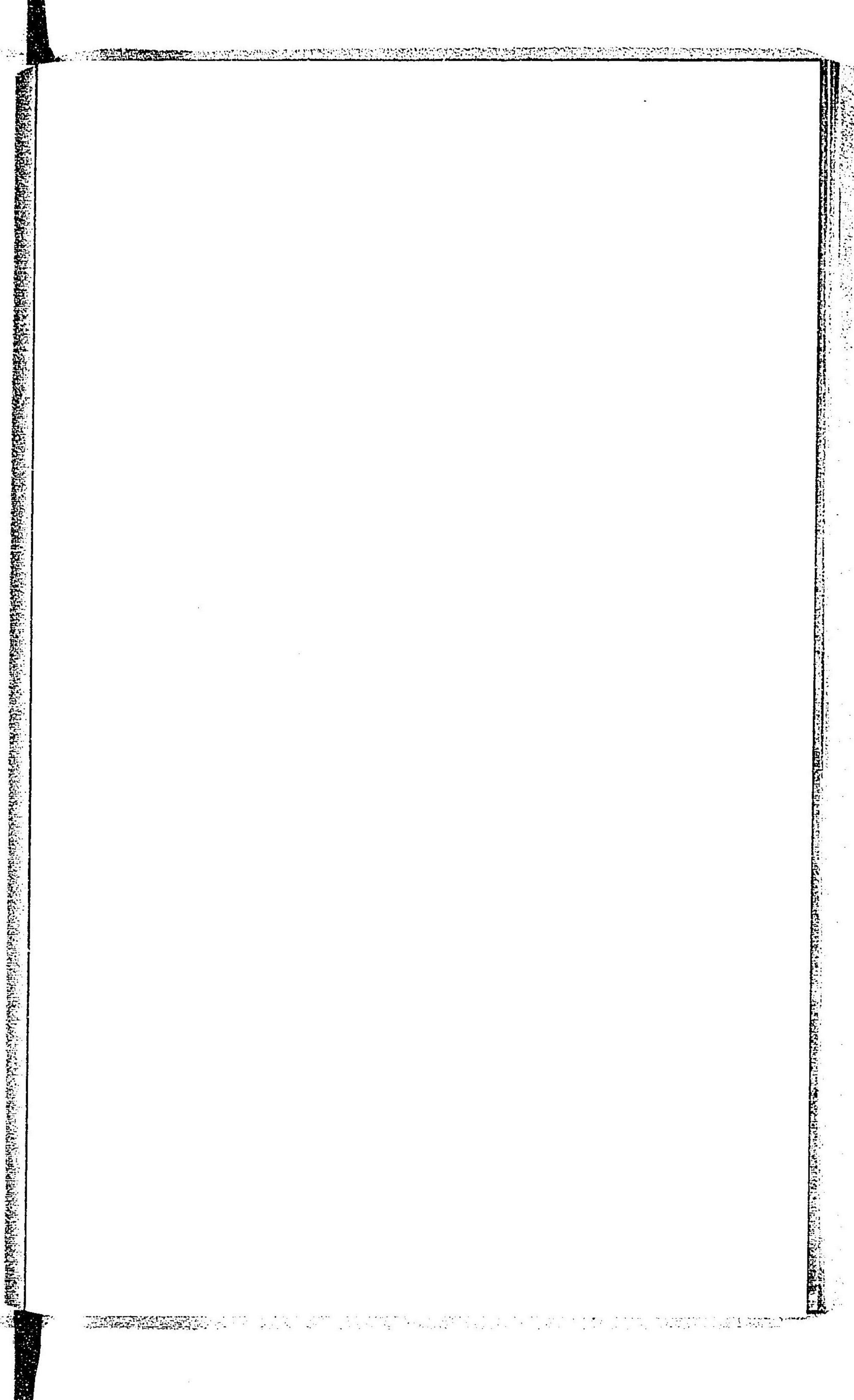
星小平森久津江邊財小口岩石齋仙田谷服冠大全谷山金全谷秋田倉皆原岡竹松平實
野倉川田保田間野津野田佐崎藤田中中部 野 中本子 中元中田川 田内井山名
田源 鷲富 大 練 妙 慈
鬲文廣壽嬰一桂智海惠 蔭文五次妙海圓存 宣福行學練應明智日日泰 隆遠義孝日
兒承德善瑞那秀門應代吉英耶那運勇寺忠城輪寺寺隆丹寺明乘心靜退信周光順溫

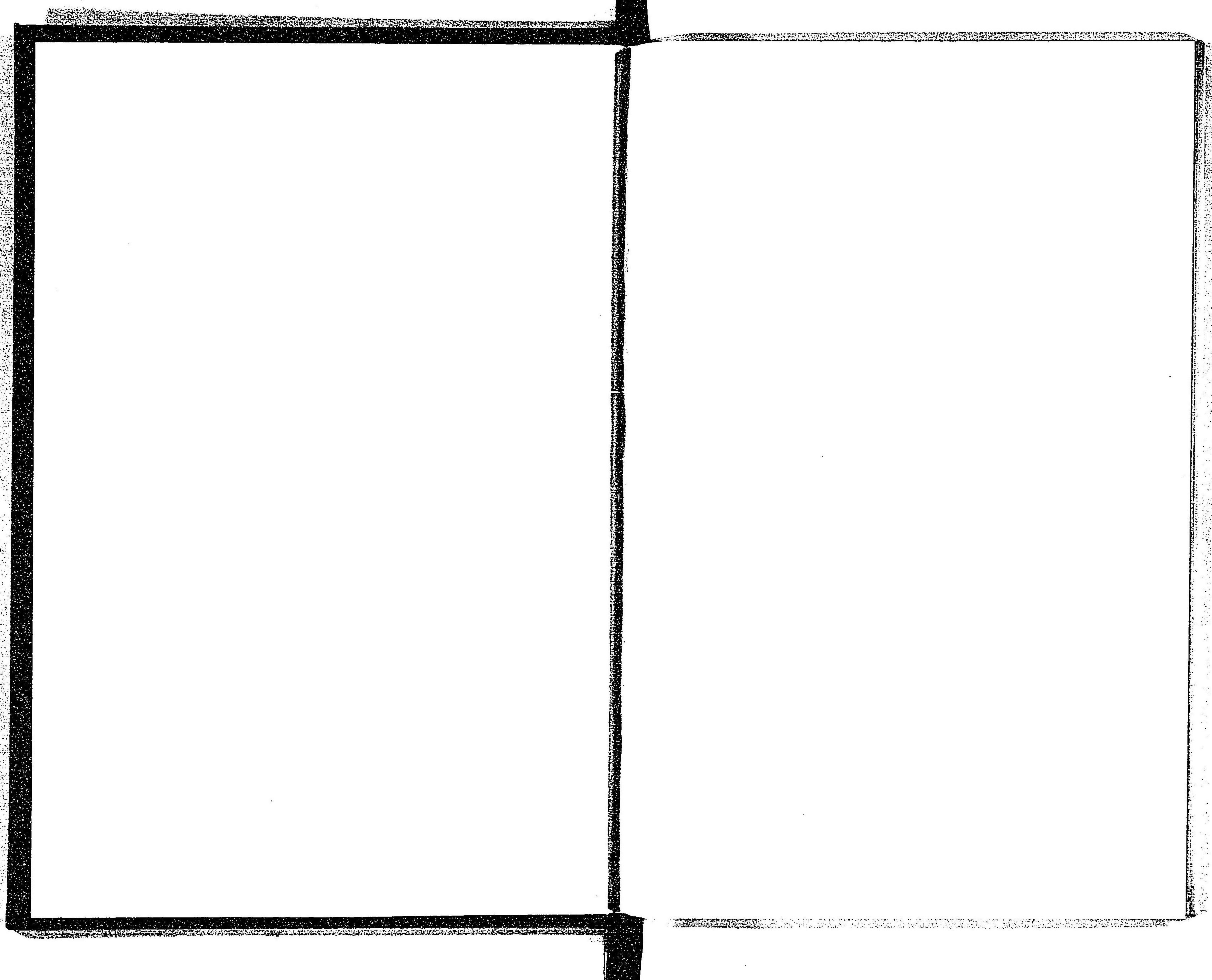
(三)

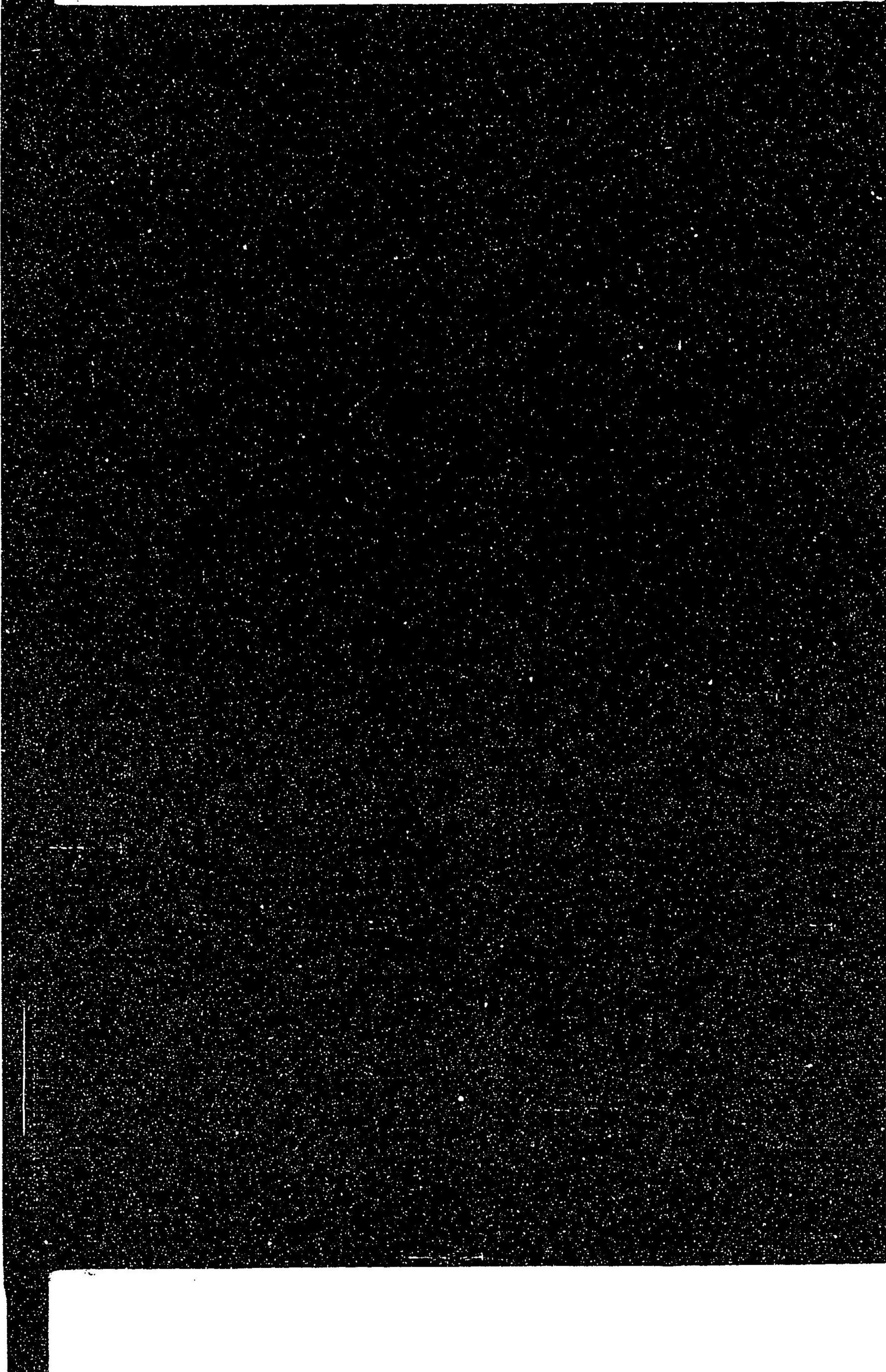
金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金
五五五五五五五五五五五五壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹壹
十十十十十十十十十十十十圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓
錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也

清橋全全全谷柳米福中吉大佐戶藤三密土小神柴檜飯高石全全山中山 栗鐘今飯保矢
原滿 中下川島西岡磯野田田田藤島島野田山田島川 谷村川木木村田飯島
嘉大安大妙 武吉妙 齋 忠 常安圓
惠之行立王法即焚慈兵兵大幾唯日王海次存寅日仁日音倉福盛常辨智日詮隨完智泰
五助寺寺寺寺圓林海衛衛寺遠祭進寺實那省遠珠秀淨百百寺寺寺隨應猛妙順融寅通









特21

801

020152-000-4

特21-801

本化門下専門夏期講習会講義録

中川 観秀/編

M35.1

ABH-0367

